

---

# Death purge

mshミクネギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Death purge

### 【NZード】

N1683Z

### 【作者名】

ミシミクネギ

### 【あらすじ】

この世界は何者かによって仕組まれた歯車に従つて動いている。歯車は一つ一つが世界を動かしていく、それにより世界は安定した状態を保てているのだ。

だが、世界の歯車に属さない者たちもいる。属したくても属せない、そして世界に関わりたいのに関われない者たちだ。そんな彼らが世界を憎むのは必然とも言えたのかもしれない。

歯車の外の存在は世界に関わればかかわるほどに世界を壊していく。それを食い止めるのが同じように世界の歯車に属さない凜也たち死

神に課せられた使命である。世界の歯車を守るため粛清を行い続ける凛也であったがとある少女に恋をしてしまった。

これは世界を裏切った死神の物語。

訳あつてとある学校の文芸部冊子に同じ作品を載せる予定です。

その名は死神、死を司るもの。（前書き）

設定内容がやや複雑な上に結構イタイです。  
途中説明口調になっている部分も多々ありますので、それでも平気  
といつ心優しい方はぜひお読みになつてください。

## その名は死神、死を司るもの。

あなたは『死神』と言われてどんな神を思い浮かべるであろうか？ 獣のような、はたまた人型のような、もしくは概念のよつたものを死神という、様々な考え方があるだろう。

しかしそれは個々人の中で形成された一つの存在であり、あくまで曖昧な存在なのだ。

故に誰も本当のことを知らない。

知つているかのようで誰もが眞実を理解できていない。

これを聞き、あなたがどう思おうが、感じようがそれはあなたの自由である。

そもそも存在するかどうかさえも分からぬのだ、共通の理解を求めることがどこがましいことだろう。

ただこれを聞き、あなたが何かを思い、感じてくれるのならそれでいい。

では、あなたにもそろそろ聞いてもらおうか。

曖昧な存在である死神の少年と、そんな死神に魅入られた少女の物語を。

「あれー？あれえー？あれれー？」

少女、如月明日香きさらぎあすかは目覚まし時計と睨み合いをしていた。

「おつかしーなー、おかつしーなー……」

時刻は午前9時。今日もよいぽかぽか天氣である。しかし問題はそこではない。

確か今日は……祈りながらも如月はパンツと近くに置いてある携帯を開いてみるが、

「Oh - m o n d a y . . .

そこには無常にも今日が月曜日と知らせるアルファベットの配列

が表示されていた。もちろん、今日は祝日などではない。

「ちつ、全速力で走れば……！」

残念ながら明日香は電車通学だ。

「急行に乗ればあるいは……！」

そして、残念ながら学校が始まるのは午前8時20分からである。

「どちらにしても遅刻じやんつ……！」

そう言いながらも明日香は服を着替え、カバンを持つと朝食もとらずに家を駆けでた。

少しして駅につき時計をみた時、時刻はすでに9時30分だった。

（一時間目は無理かああ……）

そう思いながら電車に乗り込もうとした時だ。

どんつと何かがすごい勢いでぶつかってきて明日香は尻餅をついた。

「あやつ……痛い！」

涙目になりながらあたりを見渡す明日香だが自分にぶつかってきた『何か』は全く見当たらない。首を傾げ、お尻をさすりながら立ち上がった明日香であつたがそこにトドメがさされた。

ピンポーンという軽快な効果音とともに乗り込むはずだった目の前の扉が閉まったのだ。

「……」

無言で扉を見つめる。

『4番線より電車が発車いたします。黄色い線の内側までおさがり下さい。』

ガタンゴトンと動きだす電車をそのまま無言で見送り、時計に目を落とし呟いた。

「はは～、二時間目も間に合わないな、これは。」

明日香は10時30分頃によつやく学校へたどり着いた。

明日香の通つている学校の名は私立神流学園。そこと頭が良く

なければ入れないレベルの高校であり、自由をモットーとしている学校で校則もかなり緩めではあるが、流石に三時間目まで遅れると話は別である。

明日香は一年C組のドアの前に立つと笑顔で開け放つた。

「すみません、寝坊しましたっ！」

「如月さんっ！？」

三時間目の授業をしていたのはC組のクラス担任兼英語教師の梨月さや先生だ。身長はあまり高いとは言えない明日香よりも低いにとてもくつきりとしたぐいれを持つ人気の高い先生である。同性の明日香からみても可愛らしい彼女はそのまま続けた。

「大丈夫でしたっ！？ケガはありませんかっ！？」

「え、あの……寝坊してそこまで心配されるとすごく傷つくんですけど……」

「やつぱりケガしちゃったんですか！？先生心配してたんです。頭とか、平氣ですか？どこか痛い所ありません？」

「先生、嫌がらせですか！？勘弁してください、そこまで言わなくともいいじゃないですか！？確かに私の頭はちょっとネジが足りてないですけど！」

「ネジっ！？ネジが頭に当たったんですかっ！？」

「は……？」

明日香がポカーンとしていると窓近くに座っている見るからにスボーツ少年な草村滉侍が笑いながら止めに入った。

「先生、話がかみ合つてしませんよ。多分こいつは普通に寝坊しただけです。」

それから明日香の方に顔を向けると事態を説明してくれた。

「実はさつき通学路の途中にあるビルが解体中に崩れたそうなんだよ。んで先生は巻き込まれてないかお前を心配してくれてたわけ。

「

そういうえばと明日香は今朝の記憶を辿る。駅からここへくるためにいつも通る道は交通規制がかかっていて回り道をさせられたのだ

つた。

「なるほどねー。先生、私は大丈夫です。わざわざ心配してくれてありがとうございます。」

さや先生は本当に生徒思いでこう暴走してしまったことがあるが、明日香は素直にそれを嬉しいと思っている。それに対する感謝を述べ明日香は自分の席、滉侍の前に座った。

「はあ、なら良かつたです。えと、すみません。先生取り乱しちゃいましたねつ、では授業に戻ります……。」

そしてその日も明日香はいつも通りな一日をすごすはずだった。

時は少し遡り明日香の家の最寄り駅にて。死神の少年影椰子凜夜かげやしづるやはアウタークリーで標的のアウターを追っていた。

右手には身の丈を超える黒くまがまがしい大鎌を持ち、背格好が高校生くらいの少年が駅を走り回っているというのに誰もが気づかないのは少年の体が不可視であるからだ。

当然そんな芸当が一般の男子高校生にできるわけがない。

最初に言つた通り少年は人外の死神だ。

人よりも遙かに高い運動能力を有し、死を司る武器を扱う死神の目的は運命の歯車を乱すルールアウターの殺害である。ルールアウターとはこの世の摂理から外れた生き物のことだ。生き物には生まれてから死ぬまでに粗方の運命が決められているのだが、何かのきっかけで運命の歯車から外れてしまうことがある。本来死んでいるはずの存在が生きているその状態は世界の運命をも壊し、破滅させていく可能性があるため死を司る死神が殺す必要がある。

アウター達は運命の歯車から外れているため常識では考えられないことを起こす可能性も少なからずある。しかしどんな奇跡をも確実に死に至らしめる。それが死神具だ。死神は主に自分の死神具を使って対象を殺す。

また死神は死神具を扱う以外にも神としての力を振るうことでの

きる。神の力略して神力とはアウターを狩るためにさらに世界の攝理から外れた死神たちの中で一部の死神たちがたまたま得られる力で、種類はまちまちだ。凛夜も死鎖と呼ばれる力を扱える。

そして死神達がアウター や悪魔を狩る際に使用する力、それがアウター キラーである。アウター キラーは簡単に言うとルール アウター以外の生き物からは不可視になる能力だ。これによつて暗殺も容易くなる。またアウター キラーは死神自信は勿論のことその死神の死神具、死神の力までもをルール アウター以外からは不可視にできる。

ただアウター キラーとて万能ではない。行為そのものは見えなくても結果はルール アウター以外にまで見えてしまう。例えばアウターの首を落としたとする。その際首を切られている所は周りに見えないが切られたことは周りにも見える。

つまりアウターではない人間からみたら突拍子もなく人の首と胴体が別れる現象が起ころう。それはあまりに不自然なことで、それが結果的により多くのアウターを作り出してしまつ可能性があるため、基本死神達は暗殺を遂行するのだ。

凛夜も今現在一人のアウターを追つてゐるのだがアウターは駅に逃げ込んでおり思うように動けないのだ。

「ち、あいつわざわざ一目の多い所を逃げやがつて。」

舌打ちしながら逃げるアウターを追いかけていると、同じくらいの年齢と思しき少女にぶつかつた。「きやつ……痛い！」などと言ひながらしりもちをついた少女を気にせずに凛夜はアウターのもとへ跳んだ。

「ひいっつ！？」

アウターはそんな死神をみて慌てて駅内から逃げ出した。それを凛夜も追いながら上手く誘導し、標的のアウターを人通りの少ない路地裏にまで追い詰めた。

しかしアウターは自分が人通りの少ない方へ少ない方へと誘導されていたことに気づいていなかつた。

### 一瞬の出来事。

アウターが路地裏の角を曲がったその時、凜夜の振るつた大鎌によつてアウターの頭は胴体と切り離されたのだった。

これでおしまい。凜夜は速やかに鎌をしまつとその場を離れた。

4番隊死神本部と死神の通信手段はいかにも現代らしく電話やメールで行われる。

凜夜は路地裏を離れアウター キラーを解除したのち携帯で電話をかけた。

「こちら影椰子。標的アウターの死亡を確認した。」

その凜とした冷たい少年の声に対し老人のしゃがれた声が返されてくる。

『うむ、『苦労。と言いたい所だがまたお主が丁度いる近くでアウターが発生したんじゃ……。』

「了解。速やかに排除する。」

『すまんのう、お前にそんな大変な地区を押し付けてしまつて。』

『いや構わない、むしろ各地を飛び回るよりかはよっぽど楽だ。だが、あえて言うのなら早く本拠地を突き止めてもらえるとありがたいんだがな。アウターならまだしも、人外の出没率がこうも高いと流石にしんどいものがあるからな。』

すでにこの会話に大抵の人はついていけないであろうから説明をしよう。

ルールアウターと呼ばれる部類には人間以外にも動植物は勿論のこと大きくわけて五つある。生族と魔族、妖族に靈族それから神族だ。人間は生族、死神などは神族の中に入る。とはいえそこら辺の言葉は曖昧で死神たちの間では人間『アウター。それ以外の生き物などをまとめてルールアウターという考え方が広まつてあり、大抵の場合人でも動植物でもないルールアウターは人外と呼ばれる。

人外の全てが悪というわけではないが中には悪質な輩もいる。その際運命の歯車を守る死神は人外をもターゲットにしなければいけ

ないのだが、これがまた辛い。人外は名前通り人ならざる者。ゆえに人を遙かに凌ぐ力を有する者も少なくない。その発生率がアウターと引き換えに最近めつきりと減っているのだ。何か企みをしているのではという声もあるが詳しいことは分かつてない。

『それについてなんじゃが、悪い知らせじや。アウターの発生と同時に魔族の反応がでた、知らせていなかつたが先程お主が狩つたアウターの発生時にも同様の反応があつた。まだ悪魔と決まつたわけではないのじゃが、可能性が高い。十分に気をつけてくれ。』

「ちつ、言つた矢先にかよ……と言つことは今この町には一体の魔族がいるんだな？ それは面倒くさそうだ。悪魔と判断し次第排除する。」

『すまないの。わしも本拠地を突き止め次第連絡する。』

電話を切り、送られてきたメールに添付されているアプリを開く。表示されているのは現在凛夜がいる周辺の地図とその上で点滅する赤と青の点だ。赤の方はアウター、青の方は魔族である。

ちなみに魔族が世界の歯車に悪意をもつて干渉した場合のこれを悪魔と呼ぶ。悪魔になると地図上では黒く表示され死神の殺害対象になる。

（それにしても科学というものは日々進歩しているな）

死神に寿命はない。他殺されない限り基本的に死神に死という概念はないのだ。そして現に凛也は死神になつてから四百年近く経つていた。

それなのに凛夜は高校生と言われても納得できる程度に成長している。寿命がない＝歳をとらないからだ。

つまり生まれた時からの死神ではないということだ、少なくとも凛夜が生まれた時からの死神であれば見た目もそれ相応の状態のままとなる。

では他殺された死神の分、死神全体の量は減り続けるのかというとそうではない。

では死神が他の死神に殺された場合はどうか。その際は一時的

に死神の数が減るもの、地区別に存在する、13人の死神たちを統べる大死神が適任者を見つけだし新たな死神に任命するのだ。

詳しい話は置いておくとして、とりあえず凛夜が百年単位で生きているのは事実であり、外見に寄らず現代の科学技術についていけない節はたまに見かけられるのであった。

何はともあれ今の凛夜にはターゲットが一目につかない所を通る機会が訪れるまで待つことしかできない。ふう、と息を吹き出し、標的を下校時に狙うため、送られてきたデータを元に最も人目の少ない場所を目指して凛夜は足を動かし始めた。

その名は死神、死を司るもの。（後書き）

どうもまむれミクネギです。

新作小説スタートです。内容イタイし、投稿速度などは遅いかもしれませんが頑張って書いていくので読み続けていただけたら幸いです。

励みとなつますので気軽に「」感想などもお寄せ下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1683z/>

---

Death purge

2011年12月5日23時46分発行